

海外研修報告書

芸術学科 西嶋憲生

テーマ「フランスおよび周辺国における映画教育の研究」

期間 2007年7月～10月

主な研修先 パリ（フランス）

はじめに（映画教育とは）

映画教育という言葉は、映画と教育を合成した用語で、日本ではさまざまな意味で戦前・戦後に使われたことがあるが、昨今使われる場合には、「映画館や公共ホール等が子ども向けに映画を使って行う教育的プログラム」もしくは「学校内で何らかの授業の一環として行われる映画の授業（鑑賞や制作も伴うメディアの歴史・文化・表現の理解）」を指している。映画教育に関する新たな関心、ニーズ、試行錯誤がわが国で積極的かつ具体的に現われ始めたのは、この5年ぐらいのことであり、それ以前から話題となっているメディア・リテラシーとは概念・用語ともに区別して使われている。

ただし、その中身は、映画を作ることに重点をおくワークショップから映画を見ることに重点をおく鑑賞プログラムまで、またその両者を組み合わせたものや映画の仕組みを教えるためのワークショップなど、さまざまなタイプがあり、また教育という面に関しても、公教育（学校教育）の枠組や時間とどういった関係を持ちながら行うかで、この用語が指す意味も変わってくるのが実情である。

下記に詳述するような事情で、フランスやイギリスと日本では、学校教育内での映画や映像の取り扱い方が大きく異なるため、今回の海外研修では日本での実践の参考となりうる「映画館での子ども向けの教育的上映プログラム」を中心に調べることにした。

フランスにおける映画教育

日本では数年前まで文部・教育関係者も含めてほとんど知られていなかった事実であるが、フランスでは小学校から中学・高校、大学受験資格試験（バカロレア）にいたる国の教育制度（ナショナル・カリキュラム）の中に、「映画」が「芸術」の一つとして位置づけられ、小学校から一教科（芸術系選択科目）として扱われている。

授業内において見せるべき映画のリストや地元映画館への流通の確保、映画専門家の講師派遣や教員への研修プログラム、教員用・生徒用のテキストの製作・販売、教室で使うためのDVD製作（通常の市販DVDとは資料、関連作品の収録など仕様の異なる独自のもの）など、きわめてシステムティックに組織、人員、制度が構築されている。

その詳細については、文化庁の調査事業の一環として実施された専門的調査の報告（『諸外国及びわが国における「映画教育」に関する調査 中間報告書』2005年3月、および『同最終報告書』20063月、いずれも財団法人国際文化交流推進協会）にゆずるが、その一連の調査の委員の一人として取りまとめに関わった私は、日本において実現可能な教育的プログラムとして、「学校教育の外部で」映画館や公共ホールを使って行われる、子どもを対象とした上映プログラムやワークショップを直接現地で目を見て、調べてみたいと思っていた。

今回の海外研修において、「フランスおよび周辺国における映画教育の研究」を研修課題としたのはそのためである。いくつかの公的機関と一般の映画館（そのなかには子どもを対象とする専門映画館ユルシュリーヌ座も含む）において、子ども観客(jeune public)に対してどのようなプログラミングやアプローチがなされ、どのように実施されているか、について調べるのが今回の主要な目的であった。

(1) シネマテーク・フランセーズ

パリ 12 区の再開発地区ベルシー公園に隣接した旧アメリカンセンター（フランク・ゲリー設計）を改築してトロカデロのシャイヨー宮から 2005 年秋に移転したシネマテーク・フランセーズは、世界でも有数の映画保存・研究施設であり独自の批評的プログラミングによる上映施設であり、映画博物館とメディアテーク（映画資料図書館 BiFi）を併設している。当初はアンリ・ラングロワ（1914-77、34 年にシネマテークを創設）の個人的収集から始まったが、現在は非営利の民間団体が文化省管轄のフランス国立映画センター（CNC）からの大きな助成によって運営している。国の選任する理事や監査もいるが、現在の会長は映画監督コスタ＝ガヴラス、館長は映画批評家セルジュ・トゥビアナである。

シネマテークのプログラムは複合的であり、増村保造、シドニー・ルメットなど数種類の回顧上映（レトロスペクティヴ）プログラムのほかに 10 以上のテーマ別上映会を定期的かつ並行的に開催している。「映画の不断の歴史」「フランス映画の予想外の歴史」「シネマテーク友の会」「もう一つの映画」「アヴァンギャルド映画」「短編映画の芸術」「ダンスのシネマテーク」などだが、そのなかに「子ども観客のための上映(Séance Jeune Public)」「親子映画会(Cinéma en Famille)」といった子どもを視野に入れたプログラムが常時組み込まれている。

「子ども観客のための上映」（学校の休校日、水曜と土曜の 14 時半か 15 時に開催）では、数カ月単位で「映画の中のマリオネット」「私は一体どこにいるの？」などテーマを決めてプログラムを組み、テキスト出版とも連動している（これまでに「映画のなかの恐怖」や「映画における大きい／小さい」などをアクト・シュドとシネマテーク・フランセーズが共同で出版）。上映前には必ず 5～10 分の解説が付くが、子どものための解説でありながらかなりむずかしい内容や言葉も含まれ、また現実と映画上の表現の違い（誇張、比喩、カリカチュアなど）や現在と映画内の物語の違い（第二次大戦後の戦争孤児など）、映画的な語り方（フラッシュバックによる回想形式など）につねに注意を喚起していた。

9 月の新学期からの特集「私は一体どこにいるの？(Mais où je suis?)」では、家や家族を離れて未知の世界に入り込む子どもが出てくる物語のなかで、見知らぬ場所、夢、旅、イニシエーションや、ときには怪物や魔法使いに出くわす映画を集めていた。主な上映作品は、ジョゼフ・ロージー『緑色の髪の少年』48（8 オー）、ルイ・マル『地下鉄のザジ』60（8 オー）、ティム・バートン『シザーハンズ』90（10 オー）、 Hou・シャオシェン『冬冬（トントン）の夏休み』84（10 オー）、アッバス・キアロスタミ『友だちのうちはどこ?』87（8 オー）、クリント・イーストウッド『センチメンタル・アドベンチャー』82（10 オー）、フリッツ・ラング『ムーンフリート』55（8 オー）、ジャック・タチ『ぼくの伯父さん』58（6 オー）、チャールズ・ロートン『狩人の夜』55（10 オー）、ヴィクター・フレミング『オズの魔法使』39（字幕版だが何歳からでも）、ヴォルフガング・ペーターゼン『ネバーエン

ディング・ストーリー』84 (VF/8 オー)、フランソワ・トリュフォー『大人は判ってくれない』59 (8 オー)、宮崎駿『千と千尋の神隠し』02 (VF/8 オー)、北野武『菊次郎の夏』99 (10 オー) などである (VF と記した以外の外国映画はすべて原語版・仏語字幕付き)。古い映画と新しい映画、アメリカ、フランス、アジアの映画などのバランスも意識したプログラミングになっている。上映後に作家やスタッフの話を聞いたり、テーマに関する実験をしたり、「驚き」を演じ撮影したりする「土曜日のアトリエ」にも参加を促している。

「親子映画会」(日曜 15 時に開催) では、短編を主体とした「フランス・アニメの半世紀」(エミール・レイノーからポール・グリモーまで) のようなプログラムのほか、そのときどきの特集上映から親子向けにふさしい作品をプログラミングしている。たとえば「30, 40 年代上海」特集からは戦争直後の浮浪児コメディ『三毛放浪記』(趙明、巖恭) 49 (8 オー)、「サッシャ・ギトリ(1885-1957)没後 50 年」特集からは『コメディアン』48 (10 オー) などというように。ここでも上映前に必ず簡単な子ども向けの解説がついていた。また、「子ども観客のための上映」「親子映画会」ともに、入場者を子どもや親子に限定しておらず一般観客(比率としてはこちらの方が多い)と一緒に見ていることも特徴の一つといえる。

子どもたちには「カルト・シネフィル(Carte Cinéfilou)」(シネフィル=映画マニアと、フィル=いたずら小僧、を掛けた造語と思われる) というパスに無料登録させて、ポイントをためて無料で映画を見たり、アトリエに参加したり、展示を見れるなど特典を与えて反復的な来場やテーマの理解を促進している点も注目に値する。

(2) 子ども映画館ユルシュリーヌ

カルチエラタンのサンミシェル大通りから少し入ったユルシュリーヌ通り 10 (パリ 5 区) にあるユルシュリーヌ座(Le Studio des Ursulines)は、1926 年開館のパリで現存する最も古い映画館の一つであり、とくに 1920-30 年代はアヴァンギャルド映画のメッカとして知られた。以来、芸術性や作家性の強い映画の上映に尽力し、50 年代半ばには、芸術的・先進的映画の上映館「アール・エ・エッセイ映画館」(次項参照)の第一号となった。インディペンデント路線を守りつづけたこの伝説的映画館をフランス映画監督製作者協会が 2003 年 3 月に買い取り、「こども観客」のためによりすぐった作品を上映する専門館としてパリ市と共同運営を始めた。「映画館でひとと一緒に映画を見る」という映画本来の文化的な形に小さい頃から親しませることに加えて、定期的に作り手との出会いの機会を設けたり、映画の多様性を子どもたちが発見する場を提供しようとしている。さらにその後、支配人・プログラム企画者のルイ=ポール・デザンジュが仲間とこの映画館を買い取り、運営をさらに強化した。このような子ども映画館はパリでも唯一だが、世界的に見てもきわめて珍しく、それ自体市場原理と逆行する面もあるので、パリ市やフランス国立映画センター(CNC)をはじめとする公的助成が継続的運営には欠かせない。

この映画館は、学校が休みとなる水曜、土曜、日曜にのみ開館し、それ以外の日は、学校の授業内での映画鑑賞(「小学校と映画」などカリキュラム化された全国的プログラムがある)に場所を提供している。切符売り場や入口ホールも幼稚園のような感じでふつうの映画館とは雰囲気はかなり違っている。上映は大人の一般観客も見ることができるが、かならず解説者(司会者)が映画について子どもたちに話をするのも特徴だろう。「子どもだ

けのために作られた映画はない」という前提の上で、子どもの映画鑑賞に向けたクオリティの高いプログラムを選定すること、アニメやハリウッド映画だけではない多様な映画(映画史的な名作、世界各国の映画、さまざまなジャンルの映画、短編映画など)にふれさせること、すぐれた作品を映画館で長期に上映し続けること(たとえば『となりのトトロ』)などを、いくつかのプログラミングの基準を持っている。子どものためのさまざまな映画ワークショップも企画している。

私が滞在した時期には、封切上映として『時をかける少女』(原語版と吹替え版を交互上映)、ロングラン上映として『となりのトトロ』(毎日曜 11 時半から)と日本のアニメを上映していたが、時間替わりのプログラムのなかで、チェコの『クルテク』や『盗まれた飛行船』、ケン・ローチ『自由と大地』、そのほか次項で取り上げる「芸術の子ども時代/映画」の作品をいくつか組み合わせて上映していた。

(3) 「芸術の子ども時代 / 映画」プロジェクト

「L'Enfance de l'Art/Cinéma」(英訳すると Childhood of Art/ Cinema、「芸術の子ども時代/映画」の意味)というユニークなプロジェクトは、パリのアール・エ・エッセイ映画館合計 28 館が連携して、3 ヶ月ごとに 10 数本の映画を選出し、それぞれの映画館で上映するプロジェクトである(パリ市が援助)。アール・エ・エッセイ映画館とは、日本のアート系ミニシアターに相当する独立館だが、専門家委員会が選定する「芸術的・先進的な映画」(アール・エ・エッセイ Art et Essai の映画)に指定された映画の上映比率によりフランス国立映画センター(CNC)から一定の助成がある。上記の子ども映画館ユルシュリーヌ座がその第一号で、現在ではアート系シネコンチェーン MK2 も含まれている。

内容は当然ながら子ども向けのプログラミングで推奨年齢も記されているが、大人の一般観客も自由に見ることができる。プログラムを写真入りで作品ごとに解説した無料配付のリーフレットがあり、このプロジェクトに年間登録した子供や家族(個人カードは年 30 ユーロ、家族カードは年 50 ユーロ)は入場料 3 ユーロ(通常大人料金の約 1/3)でどの映画館でも見ることができる(ほかに会員の集いや会報をふくむ特典がある)。アメリカ、フランス、ヨーロッパ、その他の国に関して一定の比率を基準にプログラムが組まれていること、古典作品が必ず含まれていること、外国映画は言葉や表現のニュアンスを伝えるため「原語版・仏語字幕付き」をなるべく採用していること(以下で VF と記したものは仏語吹替え版)など、映画と文化の多様性を意識したプログラミングの基準を持っている。

2007 年 6-8 月のプログラムで選定されていた映画は、カルロス・サウラ『カラスの飼育』75 スペイン(10 オー)、カレル・ゼマン『盗まれた飛行船』66VF チェコ(5 オー)、ジョン・ヒューストン『王になろうとした男』75 米(10 オー)、『オズの魔法使』39VF 米(5 オー)、『ピンクパンサー』64 米(8 オー)、ポール・グリモー『王様と鳥』79 仏(4 オー)、森田宏幸『猫の恩返し』02VF 日(4 オー)、ジョージ・シドニー『血闘(スカラムーシュ)』52VF 米(6 オー)、張元(チャン・ユアン)『小さな赤い花』06 中(12 オー)、マイク・ニューウェル『白馬の伝説』93VF アイルランド(6 オー)、ラトビア・アニメ『おかしなおかしな動物たち』96/00 台詞なし(4 オー)、欧州短編アニメ集『ファビュラス・ファビュレット』06 台詞なし(4 オー)、アンドレイ・クラフチュク『イタリア人』05 ロシア(10 オー)である。なお、会員の集いでは特別上映としてマルセル・カルネ『おかしな

ドラマ』37 仏 (9 オー) や『王様と鳥』を専門家ゲスト解説付きで上映していた (アルルカン座にて)。

8-11 月のプログラムでは、細田守『時をかける少女』06 日 (10 オー)、『トリュフォーの思春期』76 仏 (6 オー)、フランク・キャプラ『毒薬と老嬢』44 米 (8 オー)、ジョン・フォード『荒野の決闘』46 米 (8 オー)、『雨に唄えば』52 米 (8 オー)、ヤニック・ハストラップ『白くまになりたかった子ども』02 アニメ (6 オー)、ジョージ・シドニー『三銃士』48VF 米 (8 オー)、コ・ホードマン『ワニのいる庭』98/02 アニメ VF (3 オー)、アレクサンドル・ロウ『長いお下げの美しいバルバラ』69VF ロシア (6 オー)、ヘラルド・オリバレス『グランド・ファイナル』07 スペイン (6 オー)、ラトビア・アニメ『救助隊』91/96VF (3 オー) ソフィー・ルトウルヌール『ボローニャのマニユ』07 仏短編 (8 オー) が選ばれていた。会員の集いではプレミア上映として、『アクメッド王子の冒険』26 (5 オー) を上映する (ユルシュリーヌ座にてシネコンサートとして上映)。

シネマテークや各地区のリクレーションセンター (サントル・ロワジール、日本の学童館に相当) などでの公的なワークショップや鑑賞プログラム、学校での映画教育とは別に、映画館主体のイニシアティブと連携による子どもプログラムとしてきわめて面白い注目すべき試みであり、このプロジェクトに接したことは今回の滞在における最大の収穫ともいえる発見であった。

(4) ポンピドゥセンター

ポンピドゥセンターは、開館当初から「子どものアトリエ」のような教育的プロジェクトを展開してきたが、映画に関しては館内に 3 つの上映施設をもち、また 20 世紀美術と映画を結びつける考え方もつねに持ってきた。ポンピドゥセンターにおける映画上映プログラムもシネマテーク・フランセーズと同じく、企画展示との関連も含む回顧上映や各種映画祭のほか、10 ちかくのテーマ別上映会を定期的かつ並行的に開催しているが、そのひとつとして「子どもたちのスクリーン (Ecran des Enfants)」を毎水曜の 14 時半から上映している。

7-9 月は休みになっていたが、10 月から再開されたプログラムでは、チェコ・アニメ『クルテク』シリーズ短編集 (ズデネック・ミレル) (2 オー)、欧州短編アニメ集『ファビュラス・ファビュレット』06 台詞なし (2 オー) のほか、短編集『ボン・ジュルネ・ムッシューM』(5 オー)『夏の寓話、冬の寓話』(2 オー)、また長編としてはジョージ・パル『親指トム』58 (7 オー) やティム・バートン『チャーリーとチョコレート工場』05 (7 オー) がプログラムとして組まれている。また 12 月には「シネ・アトリエ」という子ども向けワークショップも開催されるようである。

ポンピドゥセンターでは、ちょうど 2007 年 9 月から翌年 1 月まで 6 階の企画展示として「ビクトル・エリセ/アッバス・キアロスタミ コレスポンダンス」展を開催中であった。同じ 1940 年生まれのスペインとイランの映画監督をフィーチャーしたこの特異な展覧会においても、二人の作品に共通する「子ども (幼年期)」が重要なテーマとして提示されていた。オープニング企画として、二人の監督および企画監修者アラン・ベルガラ (映画批評家、パリ第三大学教授) によるシンポジウムを聞いたことも大きな収穫であった。

(5) リュミエール映画研究所 (リヨン)

1985年に映画(シネマトグラフ)を完成させ公開したリュミエール兄弟の家屋(シャトー)と工場跡を映画博物館と上映・研究施設にしたリヨンのリュミエール映画研究所(Institut Lumière)は、通常の上映プログラム(秋はジョン・フォード特集、上映のない夏休みは「真夏のシネマスコープ」という屋外上映を毎週開催)のほかに、水曜と土曜の14時半から「子ども観客(Jeune public)」プログラムを上映している(外国映画はすべてVF=仏語吹き替え版で上映)。

9月は『魔女の宅急便』89(6オー)、ジャック＝レミ・ジレールのアニメ『カエルの予言』03(5オー)、B・ポヤルとM・ステパネク(チェコ)のアニメ『ムッシューとムッシュー』06(3オー)、10月は『天空の草原のナンサ』05実写(8オー)、中国アニメ『ナージャと竜王(ナーザの大暴れ)』79(6オー)『三人の和尚』60-83(3オー)というようにアニメを主体にしながら月替りでプログラムを組んでいる。

(6) その他の関連調査

ベルギー王立シネマテーク (ブリュッセル)

ブリュッセルにあるベルギー王立シネマテークは1938年美術映画の先駆者アンリ・ストルクらにより創設、現在5万タイトルの映画を収蔵している。フランスと同じく「子ども観客」という概念で、毎日曜日に「子ども観客のための上映会」(Séances Jeunes Publics/Films voor Jong Publiek)を行っている。

07年9月～08年1月のプログラムを見ると、『小公女』95(6オー)『スターウォーズ』77(10オー)のような現代映画もあるが、その大半が映画史的な作品であり、なかでもサイレント作品にピアノ伴奏をつけたり(チャップリンの『一日の行楽』19『偽牧師』23(5オー)、アーネスト・シュードサック&メリアン・C・クーパーの『チャング』27(6オー)、『ロイドの要心無用』23(4オー)、『ロイドの初恋』24とチャーリー・ボワーズ主演の『Egged On』26(4オー)など)、ルイス・ブニュエルの『ロビンソン漂流記』52(10オー)のようになかなかマニアックな作品選択に特色を見出せる。

ほかにディズニーアニメ『ジャングル・ブック』67(4オー)をはじめ、『サウンド・オブ・ミュージック』65(6オー)、ジャック・タチの『ぼくの伯父さんの休暇』53(6オー)と『プレイタイム』67(8オー)、『大人は判ってくれない』59(10オー)、人気アニメ『アステリクス』76(6オー)やベルギーのアニメ(65年の『Les Aventures des Schtroumpfs(スマーフの冒険)』4オー)、スウェーデンの『天使のともしび』67(8オー)など、欧米中心とはいえ時代・ジャンル・製作国など多様性を意識したプログラムになっている(ベルギーはオランダ語系のフラマン語とフランス語系のワロン語の二重言語の国であるため、外国映画は仏語とオランダ語のバイリンガル字幕付きが基本である)。

また「小学校での映画の古典」という教育プログラムでは、トリュフォー『野生の少年』70、『メリーポピンズ』65、ロン・ハワード『ウィロー』88、『チャップリンのサーカス』28、『シザーハンズ』90、ジャック・ドワヨン『小さな赤いビー玉』75、『キートンのセブンチャンス』25、ジャック・タチ『のんき大将』49、『ロビンフッドの冒険』38、『オズの魔法使』39、『わんぱく戦争』61、『地下鉄のザジ』59、『海底二万哩』54などが用意されている。

BFI (英国映画協会) (ロンドン)

1933年に英国内の映画促進(教育上の役割を含む)を目的に設立されたBFIは世界でもこの種の最も古い組織の一つであり、会員の会費と政府からの直接の助成金により運営されている。映画雑誌『サイト・アンド・サウンド』の発行や、教育部門とライブラリーによる教師や研究者のためのサービス提供、地方映画館(リージョナル・シネマ)のネットワークの統括など幅広い活動を行っている。なお、イギリスにおいても学校教育の中に「映画・メディア研究(Film and Media Studies)」が科目として組み込まれているが、基本的アプローチはメディア・リテラシー的な映像教育をベースにしたものである(詳細は前出『諸外国及びわが国における「映画教育」に関する調査 中間報告書』2005年3月のイギリスに関する調査を参照)。

BFI サウスバンクの劇場では各種の上映(メディアテークやアイマックス劇場も含む)のなかに、「Movie Mgie」という子ども向けプログラムのシリーズがあり、主に土曜日に上映している。2007年9月のプログラムでは、チャールズ・クライトン『乱闘街』46、フレッド・M・ウィルコックス『名犬ラッシー』46(無料上映)、ステイーヴン・J・アンダーソン『ルイスと未来泥棒』07、ジョン・バダム『ウォー・ゲーム』83(PG)、ミシェル・オスロ『アズールとアスマール』06などを上映している。関連して、特集上映の中から作品を選んで「子ども連れの大人のための上映会(Screening for Adults with young children)」も毎月実施している。また一般向けの教育プログラムとしては、企画上映(今シーズンは「英国ドキュメンタリーの歴史)」について学ぶコースを開講している。

BFIが主催するロンドン映画祭(51回目、2007年10/17-11/1)においては教育プログラムの一環として「エデュケーション・イヴェント」を展開している。映画祭参加作品から12作品を選び、正規上映前の午前中に生徒・学生・教員等向けの無料上映を組み、監督や出演者とのQ&Aも組まれている。また授業との関連を「カリキュラム・リンク」として示し、たとえば『ペルセポリス』(マルジャン・サトラピ、ヴァンサン・パロノー)では「映画・メディア研究(脚色、表象、ジャンル)、歴史、宗教研究、心理学、市民権」、『赤い風船の旅』(ホウ・シャオシェン)では「フランス語、映画・メディア研究(フランス映画、表象)、演劇、アート&デザイン」、『ツヤの結婚』(ウォン・クァンアン)では「映画・メディア研究(女性表象、ジャンル、世界映画)、人類学、宗教研究」などと指示してある。ほかに無料の短編上映(小学校向け、中学校向け)やアニメ、ビデオ製作、衣裳などのワークショップ(一部無料)も行われている。

こうした映画祭としての取り組みは、日本の映画祭には欠如した「観客としての子ども」「教育のツールとしての映画」を視野に入れたアプローチとして注目すべきである。

おわりに

日本におけるここ数年の活発な実践(ワークショップ、映画教室、その他の教育的プログラム)については、『「こどもと映画」プログラムの現在/諸外国及びわが国における「映画教育」に関する調査-実践編報告書』(2007年3月、財団法人国際文化交流推進協会・コミュニティシネマ支援センター)にくわしい事例が具体的に列挙されている。それらはいずれも各地で独自に創案・実施されたものだが、そこで早急な課題となっているのは、プ

プログラミングやワークショップの方法論の確立、個別の散発的な実践を全体としてつなぐような枠組・構造・助成システムの確立、共同使用できるテキストや配布リーフレットの作成、教員向けの研修プログラムの研究、子ども向けにふさわしい上映作品リストの作成と実際に上映可能なフィルムのライブラリー化などである。

今回の海外研修で調査できた具体的な諸事例は、いずれもそうした課題の検討に大いに役立つものといえる。とりわけ重要なことは、今回接した子ども向けの教育的プログラムが、いずれも公的な援助・支援なくしては実現しえない、商業主義とは相容れない文化的営為である点である。文化庁、企業メセナだけでなく、都道府県や市区町村レベルでの理解と支援もこうした活動には不可欠であると今回の研修を通じて強く感じた次第である。

（付記）この報告の一部は、2007年10月25日、東京国際映画祭の関連企画「第4回文化庁全国映画祭コンベンション」（主催文化庁）におけるディスカッション「映画と子ども」においても発表された。